

厚生文教常任委員会先進地行政視察報告書

1 視察の目的

道内先進地における諸施策の実施状況を視察調査し、当町の現状を踏まえて今後の議会活動に処するため。

2 視察日程等

(1) 期間 令和7年10月13日(月(祝))～10月15日(水)の3日間

(2) 視察先及び調査事項

学校法人学びのさと自由が丘学園(長沼町)

・新しい教育のかたちをめざす学校について

社会福祉法人勤医協福祉会(札幌市)

・一時避難場所及び福祉避難所としての機能を持つ施設について

株式会社由希(室蘭市)

・共生型デイサービスについて

(1) 学校法人学びのさと自由が丘学園（長沼町）

- 1 視察先 まおい学びのさと小学校
- 2 視察日程 令和7年10月13日（月(祝)）午後1時30分から
- 3 参加委員等
委員 室崎委員長、石澤副委員長、音喜多委員、南谷委員、金橋委員、大野委員
随行（議会事務局） 亀井事務局長、高橋主幹専門員
視察対応者 学校法人学びのさと自由が丘学園理事長
まおい学びのさと小学校校長 細 田 孝 哉
学校法人学びのさと自由が丘学園理事
まおい学びのさと小学校事務長 村 重 勝 也
- 4 新しい教育のかたちをめざす学校について
学校設立に至る経緯、教育理念、取組み内容などを視察した。

1、長沼町の概要

長沼町は、人口10,057人（令和6年1月1日現在）、北海道空知総合振興局管内南部にある町。北広島市の東に隣接し、夕張川、旧夕張川、千歳川が流れている。産業は、農業（稲作、畑作、果樹栽培）が盛ん。味付けジンギスカン・レジャー施設ハイジ牧場がある。

2、学校法人学びのさと自由が丘学園（まおい学びのさと小学校）における新しい教育のかたちをめざす学校について

- ① 和歌山県「きのくに子どもの村学園」をモデルとして、「学校法人学びのさと自由が丘学園」が運営する「まおい学びのさと小学校」は、新しい教育のかたちをめざす認可小学校である。子どもたちは自らの好奇心や興味関心に基づいた体験的な学びから自分の頭で考える力や自らの意志を表現する力を育む。そのため、宿題もテストもない、チャイムも鳴らない、先生と呼ばれる大人もいない学校である。
- ② 学園の理念は、「まずは子どもを幸福にしよう。すべてはそのあとに続く。」イギリスの教育実践家A.S.ニールの言葉とすることであるが、どんなに社会的地位が高く、多くの収入を得ていても、幸福であるように感じられない大人達。一方で、自分のこともまわりの人たちも大切にし、この世界には素敵なことがたくさんあると感じさせてくれる大人達。後者のような大人が増えると世の中は寛容で優しい世界になっていくはず。そのためには、まず、子ども達が幸せな笑顔いっぱい成長していけるようにしたい。それこそが、これからの時代の真の豊かさと平和を実現していくことにつながる。もう一つは、「1オンスの経験は1トンの理論にまさる。」アメリカの教育学者ジョン・デューイの著書「教育と民主主義」の中の言葉であり、知識貯蓄型（P.フレイレ）の知識ではなく、身体的な学び、経験の豊かさを大切にする。この二つの理念によりスタッフ（おとな）が実際に実践している学校である。

- ③ 同小学校の設立経過は、昭和61年に新しい教育・学校をめざす研究会を発足し、数々の研究を重ね令和2年には特定非営利活動法人まおい学びのさとの設立を経て、令和4年に北海道から学校法人設立及び小学校設立了承、認可取得をし、翌令和5年4月から「まおい学びのさと小学校」を開校している。認可を受けるハードルは高かったとのことである。

初年度は、4年生までで2・3年生は公立からの転入を含め合計55名でのスタート。現在95名。遠くは四国から東京以北はいない。栗山町、南幌町など地元が多い。

同小学校は、住民の寄附及び校長の退職金で約8千万円で設立、学校は町の所有で借り受けしている。事務長は、高校の教員だったが地域おこし協力隊として神戸市から来た。

通園は、スクールバスが35名、ほかは保護者の送迎となっている。

長沼町は、町立の小学校を平成28年4月に長沼中央、北長沼、南長沼、西長沼、長沼舞鶴の五つの小学校を統合している。

- ④ この小学校は、上から押しつけるのではなく、体験により方法を見つけさせる。体験で学ぶものである。

1～6年生は、学年制ではない。料理、演劇、ものづくり、農業・畜産のプロジェクトにより、この中に学習指導要領の国語、算数、理科、社会を一人の人間として教える。

よりどり授業（自由選択科目）では、プロジェクトや基礎的学習では網羅できないような運動、音楽、図工、外国語などを学ぶが、球技、show、探検、ボードゲーム、クラフトバンドやサッカー、スポーツチャンバラ、SNS、書道、図工があり、この他、北海道の歴史や文化など地域の特性を活かしたことに、今後取り組むことを想定している。

全国で不登校は34万人いると言われているが、フリースクール、不登校、障がい児ではない普通の小学校であり、カリキュラムが違うだけである。

- ⑤ スタッフ（おとな）＝教員は、20歳代から60歳代までの男女半々ほどである。給与は、公立の約7割程度であるが、公立学校を退職して、同小学校に来られた熱意ある方々である。

公立は、テーマを決めて冊子を作って要領を定めているが、ここは、日々の実践である。

毎週木曜日には先生達でプロジェクトの在り方、考え方の研修をしている。地域や保護者との関わりを持つためとして、田植え体験や、羊の毛刈り、ツリーハウス、ウッドデッキの作成見学等々「学び」は子ども達に加え、スタッフのため、保護者のためでもあり、正解はなく、考えを出し合って導いている自慢のスタッフですと理事長である校長は強く言っていた。

【時間割】（2024(令和6)年度）登校時間9:00 下校時間15:30

		月	火	水	木	金	
	9:00	ユースフルワーク					
1	9:10 ～	プロジェクト	プロジェクト	基礎学習	プロジェクト	国 際	
2	10:40					基礎学習	
		ブレイク・もぐもぐタイム					
3	11:00 ～	プロジェクト	プロジェクト	よりどり B	基礎学習	プロジェクト	
4	12:30	基礎学習		(自由選択)			
		昼食、昼休み					
5	13:30 ～	よりどり A	プロジェクト	1234年 よりどり A	56年	特別活動(環境・個人)	プロジェクト
6	15:00	(自由選択)		(自由選択)	国際	全校ミーティング	
	15:10 ～ 17:30	放課後					

(パンフレットより)

3、まとめ

和歌山県きのくに子どもの村学園の卒業生では、当然に高等学校に進学した方もおり、中では高等学校での成績が平均順位で20位となった卒業生もあり、スイスに留学し、その後は日本に戻ってから大手商社に勤めた方もいるとのことであった。

「学校法人学びのさと自由が丘学園」では、高等学校は設置基準が高いが、現在、中学校の認可申請をしているとのことである。3年間の義務教育の中では、中学は探求ゼミナールのように自分で見えてくる、自分で力を備えてくると言っていた。

理念を根底におき、子ども達のために常に前進を続けられている取組みに感銘を受けた。

学習指導要領の規定があるものの、教科を横断的な形態として取り組むプロジェクトや自分の興味を選択するよりどり授業は印象的であった。



研修の様子



事務長 ・ 校長



よりどり授業の様子



校舎玄関前にて

(2) 社会福祉法人勤医協福社会（札幌市）

- 1 視察先 特別養護老人ホームもなみの里
- 2 視察日程 令和7年10月14日（火）午前9時から
- 3 参加委員等
委員 室崎委員長、石澤副委員長、音喜多委員、南谷委員、金橋委員、大野委員
随行（議会事務局） 亀井事務局長、高橋主幹専門員
視察対応者 社会福祉法人勤医協福社会 副専務理事 権 平 幸 恵
 社会福祉法人勤医協福社会
 特別養護老人ホームもなみの里施設長 山 崎 晶 宏
 社会福祉法人勤医協福社会
 特別養護老人ホームもなみの里事務長 佐 藤 直 樹
- 4 一時避難場所及び福祉避難所としての機能を持つ施設について
背景・経過、取組み内容などを視察した。

1、札幌市の概要

札幌市は、道庁所在地及び石狩振興局所在地。政令指定都市である。北海道の行政・経済・文化の中心地であり、人口1,967,361人、令和7年9月1日現在）で、北海道の中心都市であり札幌都市圏を形成している。

2、社会福祉法人勤医協福祉会「特別養護老人ホームもなみの里」における一時避難場所及び福祉避難所としての機能を持つ施設について

- ① 社会福祉法人勤医協福祉会は、「いつでも、どこでも、だれもが安心できる医療と福祉をめざす運動と利用者の要求に応えた非営利の事業を通じて、地域社会の発展と福祉の向上に貢献する。」と宣言し、事業を展開してきている。

特別養護老人ホームもなみの里は、理念を「人権を尊重し一人ひとりの生活要求を大切にし、障がいがあっても、認知症になっても、また、必要な時に医療と連携して、安心してその人らしく自由に生き生きと暮らせる” ついのすみか” となる施設」をめざし、「地域の様々な団体・個人との連携をすすめ、地域に根ざしたなじみの関係、環境を大切にし、子どもからお年寄りまで、地域の皆さまが施設を活用し、ともに安心して暮らせるまちづくりと災害時や困ったときなど、いつでも相談、援助ができる施設づくり」及び「互いに学び成長でき、生き生きと明るく働ける職場づくり」をすすめ、「お金のあるなしで差別されない、安心して生活ができる社会保障制度をつくるため、地域の皆さまと一緒に取組む」としている。

- ② 三世代が集う特別養護老人ホームとしての運営に当たり、その体制を構築したきっかけや背景等の経過としては、開設当時、保育所事業所数も少なく、産休明け、育休明け職員がすぐに職場復帰できないことが多かったこと。特に建設予定地の南区石山地域は中心地からも遠く、保育所も少なく、待機者を多く抱えていた状況にあり、また、交通の便も悪く、職員確保の面でも職場内保育が強く求められていた。同時に高齢者にとって、子どもと接する機会を持つことは、自身の過去、楽しかった頃を想起させると共に楽しい時間を共に共有し、心の豊かさと安定を

図る貴重な機会となると考え、このことにより、職員にとっても、子どもから、お年寄り、障がいを持つ方々まで、世代を超え、共に育ち合う共生の場となれればと考えた。また、特別養護老人ホームの建設申請に当たり、地域住民の声を聴かせてほしいと、近隣の町内会へ申し入れ、説明会を開催し、地域に開かれた施設として大きな期待の声を聴かされたとのことである。施設内には地域交流室を設け、いつでもだれでも活用できるだけでなく、防災の拠点としての機能と役割をもつ施設として開設した。

- ③ 事業内容は、特別養護老人ホームが定員80名（10名×8ユニット）で全室洋室タイプの個室。医務室（クリニック）がある。

在宅生活支援は、ショートステイ（短期入所生活介護）が定員20名（10名×2ユニット）、デイサービス、訪問看護ステーションとなっている。平成27年度開設。

- ④ 災害時における地域の一時避難場所として、また、防災拠点としての機能を備えた福祉避難所を設けた理由や背景は、東日本大震災を機に札幌市が防災計画の一つとして、福祉避難所についても議論され始めた時期であった。特に特別養護老人ホームなど大きな施設を建設する際は、福祉避難所を併設し、日常的に地域住民と連携し、共に防災訓練を実施するなどの活動を推奨していた。当該施設としても開設の際、前述した地域交流室をいざという時の福祉避難所として地域に活用できる建築構造を採用し、継続的に町内会役員とも相談をしながら防災訓練を実施し、さらに、施設内のトイレや水などを地域に開放している。実際の災害時には、ブラックアウトの際隣のマンションの方にトイレを開放した。

川の氾濫による災害時での利用者の避難は1階から2・3階への垂直避難である。

- ⑤ 行政や地域住民との連携とその取組み内容としては、行政とは防災関係で、札幌市から数回にわたり現状の対応や取組み状況を確認し合っている。地域住民とは防災訓練を共に実施するほか、地域住民・共同組織の方々と健康まつりなどを一緒に企画運営し、実施している。

特にコロナ禍前は、定期的に地域の方々や入居者家族を招き、認知症カフェの開催、その他毎週地域交流室を利用し、婦人会などの集まりや習い事教室を行うなどの連携をしていた。ただし、コロナ禍後については、まつり以外は集まっての行事は自粛傾向となっている。

- ⑥ 事業実施の成果としては、特別養護老人ホームもなみへ入居された方やそのご家族から、職員も優しく、入居させてもらい本当に良かったなどの評判もあり、他の施設と同様に職員確保には苦慮している状況下にあるが、入居者は80床を切ることなく運営している。

三世代が集う施設として10年間運営してきたが、高齢者にとっては、園児と過ごす時間は笑顔の絶えない、大変貴重な時間となっている。しかしながら、保育士確保が難しく本年11月をもって保育園を廃止することとなった。

- ⑦ 課題としては、介護保険制度改訂により、入居は原則要介護3以上となったこと（特段の事情があれば入居可）により、施設に入りたくても入れない利用者が増えているとのことである。また、介護認定自体生活実態に見合わず、低く判定が出ている印象がぬぐえないとの見解である。さらに、物価高に加え燃料費の高騰である。満床でも黒字になっていかない傾向であり、施設管理も10年を超え、各設備の修繕、購入が後を絶たず、施設維持に係る費用が年々増加してきている。

前回の報酬改訂では若干基本報酬は上がり、取れる加算を全て取ったとしても赤字決算であり、利益予算には届いていない。次回の改訂では引続き報酬の引上げに期待を寄せていることは、十分理解できる。

加えて、介護職不足は深刻な課題として受け止めており、次年度にICT導入（札幌市の補助金4/5）をめざし、外国人の受入れなどを本格的に検討している。

3、まとめ

福祉避難所として活用できる地域交流室は、移動式建具で仕切られるものになっており、平常時の使用と災害時の活用と多様性があるものであった。施設の随所に職員が休憩するスペース、面談室、ボランティア室があり、災害時に福祉避難所として、個室が必要な避難者をも受け入れられるものである。避難テラスは車いす、ストレッチャーで避難できる全室周回できる回廊となっている。また、外部の階段や避難滑り台に到達できる構造となっていた。

施設入居者とそのご家族、施設職員、地域住民が活用しやすいものとなっており、建設以前から近隣住民の意見も反映された経緯であることから、当該施設が構成する間取り、配置、設備、活用手法など多くの利点を学ぶことができ、この手法が有効であることを実感した。

我が町の”まちづくり”に参考となる点は非常に多い。



福祉避難場所＝地域交流室にて委員長挨拶



施設内居室入口（施設長の説明）



2階避難テラス



1階～3階の階段（2階テラスにて）



廃止の保育園（副専務理事・事務長の説明）



玄関前にて

(3) 株式会社由希（室蘭市）

- 1 視察先 ゴチャマーゼ中島
- 2 視察日程 令和7年10月14日（火）午後2時30分から
- 3 参加委員等
委員 室崎委員長、石澤副委員長、音喜多委員、南谷委員、金橋委員、大野委員
随行（議会事務局） 亀井事務局長、高橋主幹専門員
視察対応者 株式会社由希
 デイサービスゴチャマーゼ管理者 杉 浦 理 恵
 株式会社由希
 おたがいサロン管理者 石 倉 麻 美
 室蘭市議会議員 小 澤 悠
- 4 共生型デイサービスについて
背景・経過、取組み内容などを視察した。

1、室蘭市の概要

室蘭市は、北海道中南部にある市。胆振総合振興局の振興局所在地。計量特定市。明治後期、日英3社合併で現在の日本製鋼所室蘭製作所、続いて現在の日本製鉄北日本製鉄所室蘭地区が設立され「鉄のまち」として発展し、東北・北海道を代表する重化学工業・港湾都市となった。市内の工場夜景は新たな観光資源になっている。

一方、測量山は渡り鳥の中継地としてこれまでに200種類もの野鳥が観測されているほか、ハヤブサの繁殖地になっている。また、室蘭近海はイルカ・クジラなどの海洋哺乳動物に出会える機会もあり、「イルカ・クジラウォッチング」をすることができる。

2、共生型デイサービスについて（厚生労働省の資料より）

- ① 共生型サービスの対象となるサービスは、高齢障害者の介護保険サービスの円滑な利用を促進する観点から、介護保険優先原則が適用される介護保険と障害福祉両方の制度に共通するサービスであり、現行の基準該当障害福祉サービスとして位置付けられているサービスである。

	介護保険サービス		障害福祉サービス等
デイサービス	○通所介護 ○地域密着型通所介護	⇔	○生活介護（主として重症心身障害を 通わせる事業所を除く） ○自立支援（機能訓練・生活訓練） ○児童発達支援（主として重症心身障 害児を通わせる事業所を除く） ○放課後等デイサービス（同上）

障害福祉サービスと介護保険サービスとの関係は、障害福祉制度と介護保険制度においては、それぞれ様々なサービスが設けられているが、サービスの内容や機能面から、障害福祉サービスに類似する（「相当する」）介護保険サービスがある場合には、障害者総合支援法第7条に基づき、原則介護保険サービスの利用が優先されることになる。

- ② 室蘭市を拠点とし、高齢者と障害のある大人、そして、子ども達が一つの空間で一緒に過ごす共生型デイサービスを提供している。

スタートは、代表の自宅から始まった。大切にしていることは、「共に助け合い、支え合いながら、一人ひとりの生命（いのち）を活かす経験」「一人ひとりが自分らしさを表現できる環境づくり」「その人ができることを活かす」このような関わり方をスタッフは実践している。

人は、できることに目が向き、自分の価値に気づくと、人との関わりを持つことに積極的になれる。自分を信じる力はそのま相手信じる力になって、お互いを認め合う「ごちゃまぜ＜共生＞社会」ができあがると言う。さらに、「ごちゃまぜ＜共生＞社会」が当たり前の未来へ向けて、開拓者精神（フロンティアスピリット）あふれるこの北の大地から、全国の仲間と共に歩み続けるとの信念がある。

- ③ 令和元年に北海道で初めて実施した共生型のデイサービスは、障害のある子どもとお年寄りが同じ場所で一緒に過ごす。子どもはお年よりから生活を学び、お年寄りは子ども達から元気をもらう。同じ空間の中でお互いが助け合う家族のように過ごせる場所となるものである。

共生型サービスについては、市も振興局も解らなかったが、富山県に先進事例があることを知り、視察見学をしたとのことである。

- ④ 視察した「ゴチャマーゼ中島」は、デイサービスでは、1日の中で決まったスケジュールやルールは特になく、ゲームをするのも、ソファでまったりするのも、ベランダで和むのも自由である。利用者のみならず、職員も全て人が自分らしく自由に生き生きと過ごしている。

放課後等デイサービスでは、ここに通う児童は、子ども同士だけではなく、デイサービスのお年寄りや職員、建物内にある食堂に来店される地域の方々と関わりながら過ごしている。職員を含め多世代の空間だからこそ人を敬い、大切にすることが自然に身につくとのことである。お年寄りから学び、誉められ、時には叱られながら学校とは違う環境で社会性を育てている。

- ⑤ ゴチャマーゼ中島では、現在、高齢者18名、児童10名（登録21名）、障がい者10名が利用している。別の地区にある「おたがいサロン」は、現在、高齢者18名（最高齢103歳）、児童10名（未就学2名）、障がい者10名の合計38名が利用している。

子どもは、おじいちゃん、おばあちゃんがいることによって、優しくなる。おじいちゃん、おばあちゃんも子どもと話をすることによって元気が出て笑顔が増えてくる。障がい児は優しさなど独特の感性を持つものがあるので、職員も成長させられる。高校1年生の者は老人と接することにより介護に目覚めた。利用者は、ここの環境がとても良く心地良いと思っている。

3、まとめ

時間帯の都合で視察できなかったものの、就労継続支援B型である「ごちゃまぜ食堂」もあり、日々高齢者、子ども、地域の方々と支え合い、助け合いながら働いている。人との会話や関わり方を身に付けたい方はデイサービスで、料理が好きで身に付けたい方は隣接されたごちゃまぜ食堂で、手作業が好きな方はお菓子の梱包作業など、得意を伸ばして成長を喜びに変えられるように支援している。

総じて、施設を利用する子ども、高齢者が共存し合っている。これは、高齢者と子どもが自然に家庭のような過ごし方をすることにより、双方にとっての相乗効果の現れである。

これらの利点と姿勢には学ぶべきところが多いものであることを実感した。我が町の”まちづくり”に参考となる点は非常に多い。



ゴチャマーゼ管理者・おたがいサロン管理者の説明



玄関・事務室・廊下



玄関前にて

今回の行政視察に当たり、各視察先の皆様には快く視察の受入れをしていただき、懇切丁寧な説明、熱心な対応をしていただいたことに感謝申し上げます。

何処もそこに住む人が一生懸命、地域発展のために課題解決に向け努力されていることを痛感いたしました。今回の貴重な行政視察の経験を議員活動に反映させ、厚岸町の発展に寄与できるよう努めてまいります。